

半年後の恋。

merinowool

半年後の恋

「あの。」

声を掛けると、その人は不思議そうに私を見た。
眼鏡の奥の目が私を捉え、わずかに細められる。

「もし、よければ。」

緊張で声が裏返りそうだ。

「お名前を、聞いても、いいですか。」

その人はゆっくり読んでいた本を置いて、私の方に向き直る。
そして、口の端に微笑みの欠片のようなものを浮かべた。

「...杜です...。」

もり、さん...

「木へんに土って書いて、杜って読むんです...。」

杜さんは空に漢字を書いて見せた。
長い指が空を切ると、なんだか魔法をかけられているみたいな気分になった。

杜さん...

私は頭の中で反芻する。
名前が聞けただけで、嬉しかった。

杜さん、かぁ...。素敵な名前だ...

ついぼんやりしてしまった私を杜さんは見つめて、他に何か？というように首をかしげる。

「あ、えっと、その杜さん、いつもいらっしゃるので！お名前くらいお聞きしようと思いまして！そっ、それだけです！！」

私は慌ててぺこんとお辞儀をして、あたふたと退散した。

ドキドキした。
名前を聞くだけで、こんなにドキドキするんだもん。
告白なんてできるわけない。

私は駅前のコーヒーショップ「象の巣」で早朝のバイトしている。

そこに最近毎朝、開店と同時にコーヒーを飲みに現れるのがこの人、杜さんだ。

身長は180センチくらい。

ほっそりしているのですが、もしかしたらもう少し背は低いのかもかもしれないけど、バランスが良くてスラリとして見える。

いつもスーツを着てネクタイをしめてるから、多分サラリーマン。

里っぽい茶のフレームの眼鏡から覗く目はすっきりとシャープだ。

でも時々頭に寝ぐせをつけてくるところとか、コーヒーを頼む時の人見知りしそうな硬い口調とかが可愛くて。

私はいつの間にかこの人が好きになっていた。

店長は「無口だし。無愛想だし。彼が連続殺人犯でも驚かないけど」なんて笑うけど。

毎朝ドアをくぐるように入ってくるのを見るだけで、心臓が破裂しそうになるのだ。

名前を聞いてから、杜さんは来店するたび、私の方を見て、少しだけお辞儀をしてくれるようになった。

私はそれだけで、死にそうなくらいキュンとしてしまい、

「いっ、いらっしゃいませ！」

と、やけに威勢のいい掛け声をかけてしまうのだった。

その日は朝から小雨が降っていた。

傘をさせばスニーカーでも大丈夫だろうと高をくくって家を出たが、象の巣につくころには靴下まで濡れていた。

冷たさも濡れた感触も不快で、朝からげんなりした気分になった。

さらに追い打ちをかけるように不運は続く。
象の巣のシャッターが閉まっているのだ。

「え。なんで？今日、休みだったけ？」

思わず独り言を言ってしまった。

携帯で時刻を確認しようと思ったが、間違えたはずはない。

開店時間が同じ、隣にあるケーキ屋はすでに営業を始めていた。

念のため、店長に電話すると。

「もしもし...、って、えええええ！？今、何時！？」

店長は、寝ていた。

「いますぐ行くから待ってて、30分で行くから！」

という、泣き声にも似た叫びを最後に電話が切れた。

私はこの雨の中待つのか...と再び落ち込んだが。

ふと。

あることに気づく。

もうすぐ、杜さんが来るのだ。

「実は店長が寝坊して、まだ開かないんです。」

「え？」

「あのもし、よければ一緒に別のいい感じのカフェでコーヒーでも。」

「ああ、じゃあ是非...」

私は自分の妄想の素晴らしさに、ごくりと唾を飲み込む。

チャンスじゃないか。

千載一遇の。

盲亀浮木の。

よし。

思い切って、誘おう。

そう決意した。

こうなったら、全然お洒落な服で来なかったことが悔やまれる。
先週買ったあのドットのブラウスとショートパンツを合わせて、お気に入りのレインブーツで...

考えていたらベチャベチャに濡れたスニーカーの先に、黒い革靴が立ち止まる。

「休みですか。」

少しハスキーな、杜さんの声。
私は心臓を掴まれたみたいに飛び上がる。

どうでもいいことを考えている間に、本人が現れてしまったのだ。

「ぎゃっ」

私の顔を見て、杜さんは不思議そうに首をかしげる。

「...驚かせるつもりでは...」

「は、はい！すみません！勝手に驚いて！」

私はありったけの勇気を出して杜さんを見上げる。

これ以降こんなチャンスはない、と確信する。

今、言わなきゃ、どうしても、言わなきゃ。

私はとにかく口を開いた。

「いや、店長が遅れてまして、あの、カフェ。だからお茶。まだ、開かないです。しばらく。だから。」

口から出たのは文章の出来損ないのような代物で。
意味をなしたかどうかも怪しい。

杜さんは、驚いた顔をして固まってしまった。
私は泣きそうになる。

言い直したいのに、言葉が喉につまって出てこない。

「...その...」

こんな。

こんなことってあるんだ。

恥ずかしさで死にたくなかった。

雨は未だダラダラと降っていて、私の失敗を洗い流してくれそうもなかった。

わずかな雨音と沈黙が混ざり合って不思議なモザイクを作り上げていく。

どのくらいの時間がたったのだろう。

「あそこでもいいですか。」

顔を上げると、杜さんが静かに首を傾げて、向かいのドーナツショップを指している。

私はもうただ恥ずかしくて、コクンと頷くことしかできなかった。

☆

「こんなに。」

私はぽかんと口を開けてしまった。

私と杜さんの前にはドーナツが10個。

山盛り、という言葉どおりにこんもりと盛られている。

「どうぞ。たくさん食べてください。」

杜さんはにこりともせずと言う。

「は、はあ。」

実際、私は緊張で一個も食べきれそうになかったが、おずおずとドーナツをひとつ、手に取った。

杜さんは、いつものようにブラックコーヒーを飲んでいる。
髪の毛が少し濡れて、しんなりしている。
そんな杜さんもカッコイイな、とぼんやり思う。

不意に杜さんが口を開く。

「方法が見つからなくて。」

「え？」

難しい顔をして、私をちらりと見た。

「半年後くらいにしようかと思ってました。」

「は？」

話が全く見えない。

杜さんはコーヒーを置くと、ふうと長いため息をつく。

「あなたの事を好きになったのは、2ヶ月前です。」

「は。」

「だから、象の巣に通うことにしました。」

好き。

好きって。

「わ...、私のことですか!？」

杜さんは、当然のこのように頷いた。

「そうです。」

「えええええええええええええええ?!」

ちょ。

意味が。

意味が理解できない。

私の脳みそは思考回路を完全にショートさせられてパニックに陥った。

「だから、毎朝毎朝、通っていたでしょう。僕は。」

毎日、会社に遅刻ギリギリでしたよ、と杜さんは、なぜかちょっと逆ギレ気味に呟く。

そんな長期戦を覚悟していた人を前に、自分が随分とせっかちに思えた。

椅子にもたれて、ぼんやりしてしまう。

杜さんが、少しだけ首を傾げて私を見つめる。

その目が、ちょっとだけ優しい光を帯びた気がする。

いつか見たことのある微笑みの欠片が口元に舞った。

私の心臓は、やっと。

この状況に適応したのか、トクンと微かに反応する。

杜さんが言う。

「あなたが好きです。通りかかって、楽しそうに働くあなたを見た日から。」

優しい声で。

真摯で温かなトーンで。

最初から、そう言ってくれたら良かったのに。

私は思わず、泣き出しそうな気持ちになった。

いろんな思いがごちゃまぜで、言うべきことがなんにも思いつかなかった。

「……私も、です」

やっとのことで、それだけ言った。

「照れますね。」

杜さんが言う。

「え。照れてますか？」

「そりゃそうです。」

「全然そんな風には見えませんが...。」

私が鼻をすすりながら言うと、杜さんはぶっとコーヒーを吹き出す。

「そんなことはないでしょう。顔だって、赤くないですか？僕。」

そっぽを向く仕草が可愛くて、私はまたときめいてしまった。

顔は全然赤くなっていない。

杜さんは、多分自分で思うよりもずっと不器用なんだと思う。

私がかすっと笑うと、杜さんは眼鏡位置を中指で正し、私に向き直る。

「色々と、順番が狂いました。」

杜さんは、そっと私の手に触れる。

まるでそれが手順みたいに。

慎重に、そっと。

「あなたの、名前。」

「え？」

「...教えてもらっていいですか？」

コーヒーの湯気がゆらゆら、私たちの視界を揺らしていた。

半年後の恋。

<http://p.booklog.jp/book/68056>

著者 : merinowool

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/merinowool/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68056>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68056>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ